



月刊 第585号

櫻と祭り

そして早苗

気をもませる今年の桜である。寒気が居座って彼岸過ぎまで雪の日がつついて、つい野積の祭りまでは雪が降るといささか抑え込めて言い伝えられてきた。今年の町の杜氏達が酒造りの腕を競う品評会は祭りの前日に行われ優勝は栃尾の「景虎」準

優勝は栃木県の「開華」がその栄誉に輝いた。この品評会が終るとしばらくの間品評会用に特別に仕込まれたこの種の酒が出廻り左党に話題と喉の潤いを提供してくれる。

次々と各集落で祭礼の幟旗が春風にはためいてそれと同時に進行の形で春耕の季節へと向い今迄人影のなかった田島が賑わい始め耕運機がエンジン音を響かせ合い乍ら農道を往き来する。普段は抜け道、近道として便利に交通している一般車も「農耕車優先」の掲示のある農道ではこの季節遠慮勝ちに走ることになる。

信濃川は雪解水を満々と溢えていかにも大河の貫禄、分水への

の可動堰は全開となり真直ぐに日本海へ注ぐ水勢は河口附近ではどうどうと恐ろしい程に水しぶきを上げて落ちてゆく。

この雪解の水に誘われてサクラ鱒が回帰してくる。

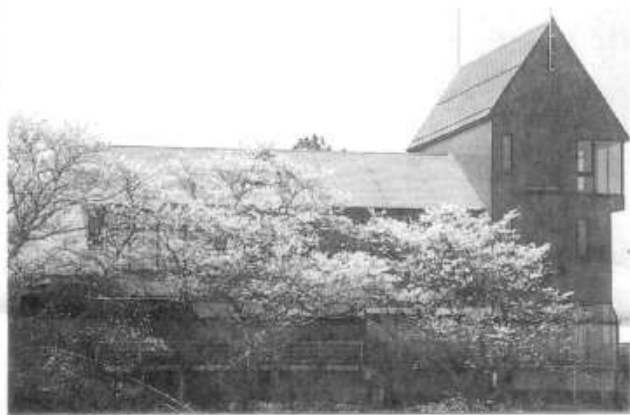
鮭は故郷の河へ三、四年で回帰してくるが、鱒は一年で戻ってくる。而も値段は鮭の十倍にもなるのだから魅力ある魚と言うことになる。サクラ鱒はヤマメの一部が海へ出て鱒となつて戻ってくるもので、山狭の清流では餌が少なく、餌を求めて自然の序列が出来、その序列から外れたつまり弱い魚が河口附近で暫らく過ごしその間に銀化（魚体が銀色に変化）して海へ

餌が豊富なので魚体は急速に成長し廻遊の径路は謎とされているようだが十倍以上の大きさに戻って戻ってくるのである。寺泊では春一番の推奨の魚である。私の好みで言うなら白焼の熱々ガラの吸物と言うことになる。河口での魚には水量が肝腎で、こんなに沢山水を出されては魚にならんと言うところなのであるが、今年の事で言うなら震災の大きな被害を受け豪雪で更に打撃を思ふなら漸く辛上流の地域を思ふなら漸く辛棒しますからどどん雪解水を流して早く春を迎えて下さいと言うことになりましょうか。

花が開きそうになつてからも



大町 生福寺の桜。
梵鐘に替って「浜辺の歌」のチャイムが流れる鐘楼をバックに。



海を背景に咲く桜は相沢美術館脇の桜。
50年前、旧国立療養所職員手植えの名残り。



雪割草やカタクリの群生地をトレッキングして訪ねる自然観賞がブーム。
弥彦山中腹、能登見平のカタクリ。



能登見平でカタクリを見て、次は国上山へ。
国上寺は春の麗かな日ざしの中で森閑としたたずまいで心静まる時が流れる。



国上寺の西門から少し下ると五合庵があります。
人影はなく、唯杉の木立と椿の花の間を春風がわたる。



山を下れば雪解の水を湛えて盛り上りながら流れ下る大河津分水。
閘門全開で濁流は一気に日本海へ注ぎ込む。

『義経記』(2)

さとうのぶひと

北よりの風の日が多く遅々としてまだ分水の桜は満開と言うところまで参りません。パッと咲いてパッと散るのが桜の生命なら今年の桜は桜らしからぬ咲き具合と言ふことになりました。白蓮なども一勢に咲いていさぎよく散る花なのに今年には花のまま腐ちて行く様子が哀れです。もうすぐ白山様の大祭。五月晴れとなるよう祈っています。

追討の宣言が下ったり、反転して義経追討の院宣が下ったり、朝廷内の権力闘争が激化します。義経は洛中での身の危険を感じ、都落ちして西海や南都吉野に逃れます。しかしすでに身の置き場はありませんでした。義経に残された最後の切り札が、北陸道から奥州藤原氏の元へ走るこ

とだったのです。『義経記』巻第七によれば、北国落ちに際して義経の一行はわずか十六名。奥方の北の方も含まれていました。山伏装束に身を固め、笈の十挺をそれぞれが背に。文治三年(1187)の二月(旧暦)京都の今出川を出立して、大津から琵琶湖を船で渡ります。越前に出る途中、三の口というところがあって、そこで一人の男と出会います。男は親切にも、奥州までの道行きを詳しく説明してくれました。男の説明の中に「寺泊」が出ており、すでに海路にて上陸することが予告されています。

「勝見」は出雲崎付近、「しらさき」は不明、「やはし」は弥彦の誤り、とされています。ところがこの男、三の口の関を守備する主人の命を受け、義経をうまく言いくるめて連れてくるように言われていたのです。弁慶がそれを見抜き、成敗します。室町中期に書かれた『義経記』はその時代、観光案内のような役割を果たしていたふしが窺えます。名所、旧跡、神社仏閣が細かく書き込まれています。弁慶の機知と活躍に助けられ、越前の国府から加賀国に出ました。ここに歌舞伎の『勅進帳』で有名な「安宅の関」があります。しかし『義経記』には「安宅の渡」とあるだけで、歌舞伎

に脚色されているような記事はありません。弁慶が主君義経を扇で打って追求を逃れるのは、越中富山の「如意の渡」です。如意の渡は高岡市の小矢部川河口の渡し船です。渡し守の権頭に義経であることを指摘され、弁慶は「歳が若いために、人が怪しく思っ

て咎め立てるのがよく、ここから帰れ」と言われて義経を船から引きずり降ろし、扇でいさか主君を扇で打つたのです。渡し守も呆れ一行を通します。同様の記事は、越後と出羽の境にある「鼠ヶ関」にもあります。親不知の難所を越えて越後に

入った一行は、直江津の花園観

寺泊小波会四月詠草

兼題 兼風・辛夷他当季

強東風や
唇乾く男坂

小形 美代

東風来たる

けさの野の色山のいろ

小島 冬扇

朝東風に

撫でられ猫は髭を張り

外山きよし

東風去りて

浜大漁の兆あり

加勢 白汀

図書室の

ほどよき孤独花辛夷

内藤 蓮子



文学を取り込んだ観光を目指して、今年も俳句結社「銀化」主宰の中原道夫氏を招いての句会。新しい碑の前で記念撮影。

天の青

こぶしの花を懐に

竹内 霍山

振り売りの

声里山は辛夷咲く

大越碧水子

夜空にも

ふんわり白き花辛夷

江原 汀子

七浦や

女釜男釜に春の風

能登 頑牛

始まりし

少年サッカー青き踏む

小島 温石

花冷や

小さき荷物を友へ出し

水沢 蕉子

春の旅

掘り地蔵と言ふ土産

中村 流瓢

ひねもすを

初うぐいすや雨上る

外山 海子

あとがき

一勢に生命が躍動する季節なのに今年春を迎える中であちこち門牌が目立つように感じられます。葬式の多い春です。誌友の方々からも死亡の通知が増えて来たように感じます。でも先日は北海道にお住いの金沢サダさんの御家族から母も百三才になりもうお送り頂いても読むことが無理ですとお断りのお電話ではありましたがよ



観光シーズンを控え、全町又友好都市からの応援も参加しての海岸のクリーン作戦。親子組も多く参加。



野積十二神社(荒谷)の祭礼行列。寺泊町で一番のお祭(4月6日)、女性の協力もあって神楽もお馬引きも。

くここまで誌友としてお付き合い頂いたとその長寿をお祝い申上げると共に嬉しくお電話を受けました。それにも又ふるさとだよりの歴史であります。そして新しい誌友も生まれていくのでありますが「ふるさと」は遠くからありて思うもので、今も昔も距離的には変わりようもないものの時間的には随分近くなつたわけであるのでふるさとへの思いは薄らいで行くのでしょうか。思い立てばいつでも訪れることのできる故郷です。五月には豊かに広がる田園は

毎月二十日発行
寺泊ふるさとだより

誌代税共(百円)

編集人 中 村 興 樹

発行人 新 潟 県 寺 泊 町
ふるさとだより

郵便番号 九四〇一二五〇二
ダイヤル局番 〇二五八七五

電話 二〇二九九番
振替番号 〇〇六二〇三三七四五

印刷所 吉野印刷株式会社